

としては D_2O , HTO, アンチピリンなどによる方法があるが、将来野外での使用、及び測定装置の利用の便などからアンチピリン法によることとした。

用いたニホンザル 8 匹は霊長研で室内飼育されているもので、Brodie 法によって全体液量を測定し、間接的には体脂肪を算出しようと試みた。アンチピリン 200 mg を 20 ml の食塩水に溶解し、静注後 1, 2, 3, 4 時間目にその血漿濃度を測定し、外挿法によって全体液量を求めた。各測定点は片対数目盛のグラフで直線上に乗っていたが、8 例中 5 例は体脂肪の算出が不可能であった。

設定課題 4. 主としてニホンザルを対象とした行動の研究

餌付け集団における個体間距離, 対人距離, Vocal Aggression 量の測定—近畿, 中国 3 集団の比較 (その 2)

○ 藤井 尚教 (阪大・人間科学)
米川 文雄 (阪大・人間科学)
小山 高正 (阪大・人間科学)

前年度に引き続き、銚子沢、臥牛山、椿の 3 集団において、1) 個体間距離のあらわれとしての集団成員の凝集度、2) サルと人間との空間的關係としての対人距離(逃走距離、攻撃距離等)、そして 3) 諸社会的状況における集団の緊張度のあらわれとしての vocal aggression 量を測定し、集団特性を分析比較した。

実験、観察の方法は、(その 1) (霊長研年報 vol. 5) を参照のこと。観察期間は、1975 年 5 月 12 日より 6 月 7 日までで、1 集団につき約 10 日間を費した。なお、各集団とも継続研究がなされていないため、家系表等の資料がなく、期間中の census をもとに結果を分析した。各集団の population は、銚子 A : 413 ± 20 、銚子 B : 120 ± 10 、臥牛山 : 124 ± 5 、椿 : 150 ± 20 であった。(最初の数値は census の最高値)

個体間距離の最高値は、銚子 A が前年度の 3 集団を含めての最高値、129 頭を示し、銚子 B が 64 頭、臥牛山が 26 頭、椿が 62 頭であった。vocal aggression 量では、銚子 A が最高の 868 音節、椿が 476 音節、そして臥牛山が最も低く、293 音節であった。しかし、1 頭あたりの平均値では、銚子 A と臥牛山は、約 17 音節で前年度と比べても最高値を示し、椿は 9 音節であった。この結果から、銚子 A は個体間距離が最も短かく、かつトラブルを生じさせるような緊張度が高い。一方、臥牛山は個体間距離は長いが、銚子 A とは異なったトラブルを持っている。椿は前年度の集団のように、標準的と考えられる。

餌付けや人付けと関係が深い対人距離では、銚子 A が 1.1m で avoid が生じ、銚子 B : 1.4m、臥牛山 : 1.25

他は体重 13 kg で全水分量 52.1%、脂肪が 28.82%、12 kg で 68%、7.1%、9.8 kg で 72.85%、0.41% という値が得られた。測定結果のこのような大きなばらつきは、個体差のみではなく、アンチピリンの血中濃度の低下がヒトにくらべて極めて速いために、体水分量の測定が不確定であることに起因する。

文献によれば、イヌもアンピリンの代謝がヒトよりも 1 時間につき 30% も速やかで、この方法による体水分量の測定は困難であるという。ニホンザルの体脂肪の測定にはアンチピリン以外の方法を用いなければならぬ。

m、椿 : 2 m で、これらの間に 1% 水準で有意差がみられた。発達のみると、若年齢ほど近い距離で avoid が生じていた。性差は、接近者に対する反応連続の型の間にもみられた。

学会における発表

第 20 回 プリマテス研究会 (1976.3.13~14)

銚子沢、臥牛山、椿、3 集団の比較

(その 1) 個体間距離について

銚子沢、臥牛山、椿、3 集団の比較

(その 2) Vocal Aggression について

第 36 回 動物心理学会 (1976.6.12~13) 予定

野生ニホンザルの接近者に対する友応とその距離

(その 2) 一餌付け集団、銚子沢、臥牛山、椿の比較

第 40 回 日本心理学会 (1976.9.27~29) 予定

中国、近畿の野生ニホンザル 6 集団の比較

(その 1) 集団成員の密集性に関する研究

(その 2) Vocal Aggression 量による集団緊張度の測定

(その 3) 接近者に対する反応の研究

Progressive Ratio (PR) 強化スケジュールによる社会的促進効果の分析

岩脇 三良 (中京大・文)

自由に行動できる部屋におかれたニホンザルの反応が、同じ部屋の中に、もう 1 頭のニホンザルが存在することにより、どのような行動変容を示すかをオペラント条件づけにより検討することを目的として、本研究が行なわれた。

4 頭のニホンザルを被験体として、実験室に設置されたレバーを押す反応が PR 8 の強化スケジュールにより学習された。すなわち、レバーを 8 回押すと食餌(大豆)が出てきて、次回は 16 回、その次は 24 回……というように食餌は 8 つずつ加算された回数のレバー押しにより提出される。例えば 30 個目の大豆を摂取するためには